

幼児にとって漢字は興味の対象

石井: 幼稚園における漢字教育の実施を提唱してその実験を始めましてから、今年でちょうど十年目になります。この十年間に漢字教育を実践する幼稚園は年ごとに増えて参りまして、いまではおおよそ三百園に達しております。幼児にとって、仮名よりも漢字の方がずっと覚えやすいということが、幼児教育者によって次第に理解されてきたためだろうと思われます。

明治以来いままで、「幼児には仮名はやさしく覚えられるだろうけれども、漢字は難しくとても無理である」と考えられていまして、仮名で読み書きができないうちは決して漢字を教えることを致しません。ところが実際に教えてみますと、幼児は漢字の方をはるかに容易に覚えます。いま「幼児は」と言いましたが、実は大人もそうです。私どもはすでに仮名を(あるいはローマ字を)覚えてしまっているので、その難しさがわからないのですが、試みにある符号にある音声を与えて、それを覚えて下さい、といったら、まずそう簡単には覚えられないと思います。実は

そういう実験をしたことがあるのですが、もうみんな駄目なのです。大体において、文字とか言葉を覚える能力は、幼児期がいちばん強いのです。記憶には、論理的な記憶の仕方と機械的に丸暗記する仕方と二通りあり、学習心理の方では、前者を論理的記銘、後者を機械的記銘と名付けていますが、この機械的な丸暗記による記憶力が、幼児期には非常に強いのです。亡くなられた大脳生理学の時実利彦先生のお説によりますと、三歳くらいまでが最も強く、三歳を過ぎるとあとはもう低下する一方だとおっしゃっていらっしゃいました。私の研究所では、三歳からの幼児を六人ほどで一組にして、それを私が指導しているのですけれども、時実先生のおっしゃっていることはまったくその通りだと感じております。

一般的に言って、仮名は、三歳ごろまでは興味の対象となりがたく、いくら教えても覚えれないのが普通です。しかし漢字の方は、三歳になれば十分に興味の対象となるので、どんな子どもでも容易に覚えるのです。記憶には関心の原理と反復の原理があり、これを記憶の二大原理と言っていますが、関心が

ないことには記憶というものは成立するはずがありません。その意味で、単に音声しか表わさない文字、つまり仮名は幼児には関心の対象になりがたく、したがって覚えがたいわけです。それに対して、漢字は内容がありますし、とりわけ幼児の興味の対象になるような内容を持った漢字、たとえば苺の好きな子どもに「苺」という漢字を示せば、それを見た瞬間にかなりしっかりと頭の中に印象づけることができるようです。数秒間見せただけでも、翌日テストしてみると、大体80パーセントの幼児が記憶していて、「いちご」と読みます。文字の学習において、関心を持つということがどんなに重要なことであるかがよくわかります。

もう一つ、漢字が覚えやすい理由として、字形の複雑さがあります。いままで字形の簡単なものはすぐ覚えられるけれども複雑なものは難しいと考えられていました。なるほど書きやすさから言えば字形が簡単な方が確かに書きやすいでしょう。しかしそれがどんな意味の字であるかを知るだけなら、むしろ複雑な方がいいようです。それは人の顔を覚えるのと同じだと思

ます。複雑な顔をしている人ほど覚えやすいのであって(笑)、複雑だということは、それだけ特徴があって印象深い、ということなのです。だから、実際に子どもに教えてみますと、鳩だとか鶴だとか亀という字は、容易に覚えてしかも忘れません。翌日尋ねてみてもちゃんと覚えていて読みます。字形の簡単なものは、特徴がなくて印象が浅いせいか記憶しにくく、また覚えても忘れやすいようです。

したがって、幼児の興味を引くだけの具体性を持ち、印象に残りやすいだけの字形の複雑さを持っているということで、漢字は幼児にとって覚えやすい文字である、と言えるのではないかと思います。